

普通温州「白川」の隔年交互結実導入初年目におけるせん定の違いと翌年の収量

普通温州「白川」に隔年交互結実を導入した初年目のせん定の違いを比較すると、慣行せん定は、刈り込みせん定に比べせん定時間はやや多いものの、翌年の収量は多く、また果実のML級果率は高い。

農業研究センター果樹研究所常緑研究室（担当者：藤田賢輔）

研究のねらい

「白川」は隔年結果性が強く、連年安定生産が難しいことから、生産現場では隔年交互結実法が徐々に普及してきている。この結実法では、2ヶ年で1回の収穫（全国的な裏年）とすることから、遊休年の管理省力化と生産年の多収を図る必要がある。

そこで、遊休年で労働時間割合の高いせん定を刈り込みせん定と慣行せん定とし、省力化及び翌年の収量について明らかにする。

研究の成果

1. せん定に要する時間は、慣行せん定を100とした場合、刈り込みせん定は92とやや少なく、また除葉率は、2年生以上の枝梢を多くせん除する刈り込みせん定が高い（表1）。
2. 翌年の葉花比および葉果比のいずれも、慣行せん定が低く、着花・果数が多い（図1）。
3. 一樹当たり収量は慣行せん定が多く、平均果重は小さい。また階級割合は、慣行せん定は刈り込みせん定に比べML級果率が高く、2L級果以上の割合が低い（図2）。
4. 10a当たり収量（換算値）はいずれのせん定も10t以上と高く、慣行せん定は刈り込みせん定に比べ2割程度多い（図3）。
5. 果実品質は、刈り込みせん定の糖度（Brix）がやや高い傾向にあるが、有意差はなく、果肉歩合、果汁歩合およびクエン酸に大差はない（表2）

普及上の留意点

1. 本成果は、昭和63年植栽樹を用い、隔年交互結実初年目の平成17年にせん定、フィガロン散布と人力による全摘果、慣行施肥および乾燥時のかん水を行った成果である。

表1 せん定の違いがせん定時間および除葉率に及ぼす影響(平成17年)

処理区	せん定時間 分/樹	除葉率 %
刈り込みせん定	48.4	39.6
慣行せん定	52.5	21.8

注1) 発芽前の3月25日～4月1日にせん定
 注2) 刈り込みせん定は、刈り込み跡により側枝切断面が水平になるよう切除
 注3) 慣行せん定は徒長枝、混み枝部の間引主体に切除

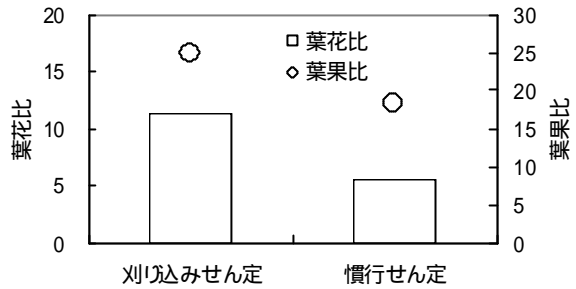


図1 せん定の違いが次年度の着花・果に及ぼす影響(平成18年)

注)長さ10～40cmの夏梢の調査結果

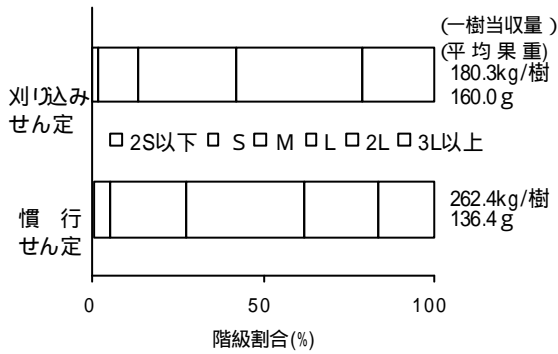


図2 せん定の違いが次年度の果実階級に及ぼす影響(平成18年)

注1)階級は個数割合
 注2)11月28日収穫

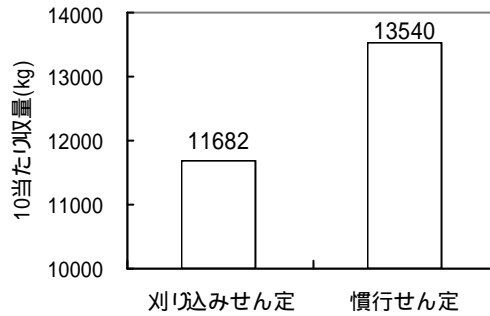


図3 せん定の違いが10aあたり収量に及ぼす影響(平成18年)

注)10aあたり収量は樹冠占有面積率80%換算値

表2 せん定の違いが次年度の果実品質に及ぼす影響(平成18年)

処理区	分析	果肉	果汁	糖度	クエン酸
	果重	歩合	歩合	(Brix)	
	g	%	%		g/ml
刈り込みせん定	162	75.3	84.9	12.13	0.850
慣行せん定	141	75.1	86.6	11.28	0.872

注) 2006年11月28日収穫、11月30日分析